# 周囲からみたスクールカースト上位者の特徴

## ―社会的勢力に着目して―

児玉真樹子・南　　晴佳[1]

（2017 年 12 月 22 日 受理）

Characteristics of high-ranking students in “School Caste” from the perspective of social power

Makiko KODAMA and Haruka MINAMI

Abstract: The purpose of this study was to clarify the social power of students who were ranked highly in the “School Caste” (class status ranking) and the determinants of these students’ social power. One hundred and sixty-three university students completed the questionnaire, which asked them to recall high-ranking students within their junior high school class’s “School Caste.” The questionnaire comprised questions regarding the social power (referent power, attraction power, punishment power, expert power) and external and internal characteristics (appearance, character, communication skill, academic ability, and attitude) of one male and one female high-ranking student. The results of cluster analysis using social power showed the difference by sex of types of high-ranking students within the “School Caste.” Regarding male students, there were three types: those with high attraction power scores; high punishment power scores; and high scores for all social power. Regarding female students, there were four types: those with all high scores for social power except punishment; those with average scores for all social power; those with high punishment power; and those with low scores for all social power except attraction. The results also revealed the existence of a “high punishment power group,” who had high scores for punishment power and low scores for the other three types of social power, among both high-ranking male and female students. Multiple regression analysis showed the same determinants of social power for male and female students: determinants of expert power were academic ability and character; one determinant of attraction power was communication skill; and one determinant of punishment power was appearance. The results also showed the following difference between male and female students: for high-ranking male students, the determinants of referent power were academic ability and attitude, but as for female students, the determinant was character.

Key words: School Caste, social power, external and internal characteristic
キーワード：スクールカースト，社会的勢力，外見的・内面的特徴

[1]神戸市立出合小学校

## 問題

### スクールカーストとは

近年，関心が寄せられているスクールカーストとは，クラス内のステイタスを表す言葉である（森口，2007）。森口（2007）によると，このステイタスの決定要因は人気やモテるか否かということであり，上位から「一軍・二軍・三軍」「A・B・C」などと呼ばれている。鈴木（2010）はスクールカーストを，教室内の生徒の人気の高低を要因として生徒の人間関係に序列構造を生み出し，それが教室内の生徒間で共有されることによって明確な身分の差となって現れる現象であると述べている。

スクールカーストを決定する最大の要因はコミュニケーション能力であり，このコミュニケーション能力は自己主張力，共感力，同調力で決定されると森口（2007）は述べている。自己主張力はリーダーシップをとるのに必要な力であり，共感力とは他者と相互に共感する力を指し，同調力とはクラスのノリ（空気）に同調し，時には空気をつくる力を指す（森口，2007）。この森口（2007）の指摘を踏まえ，堀（2015）は生徒のコミュニケーション能力の保有状態別に生徒を 8 つのタイプに分類してスクールカーストを説明している。鈴木（2010）はコミュニケーションとスクールカーストとの関連を検討した結果，コミュニケーション能力のうち自己主張力と同調力とは関連があるが，共感力とは関連がないこと，生徒の容姿と関連があることを明らかにした。また，鈴木（2010）では，スクールカーストは生徒の学校生活への適応に大きく影響を与えており，その影響は学力より大きいことも明らかにした。水野・加藤・川田（2015）は，中学生のコミュニケーション・スキルとスクールカーストと学校適応感の関係を検討した。その際，スクールカーストは，クラス内での自分の人気度およびクラス内で所属している友人グループのクラスでの中心度の 2 側面に関する自己評定で捉えた。その結果，コミュニケーション・スキルはスクールカーストを捉える側面の一つである学級内での人気度を媒介して学校適応感に影響を与えることが明らかとなった。またスクールカーストを捉える側面の一つであるクラス内での中心度とコミュニケーション・スキルとの関係は男女による差異がみられ，男子ではコミュニケーション・スキルのうち解読スキル（相手の表現を理解するスキル）および関係調整スキルが高く他者受容スキルが低いほどクラス内での中心度が高い，すなわち高い地位のグループに属していることが明らかになった。

### スクールカーストに関する先行研究の課題と本研究の目的

上述のように，スクールカーストの定義には「人気度」が含まれている（森口，2007；鈴木，2010）。しかし一方で，スクールカースト上位者が必ずしも人から好かれているとは限らないことが鈴木（2012）のインタビュー調査の結果で示唆された。さらに鈴木（2012）は，上位のグループはクラスに影響力をもち，下位のグループは彼らに恐怖心を抱くことから，スクールカーストが権力として機能していることを報告している。これらを踏まえると，特にスクールカーストの上位者の特徴を明らかにする際には，他者に影響を及ぼす力である，社会的勢力（今井，1987）を踏まえて検討する必要があろう。なお，社会的勢力とは，「自分（影響者）の望むように他者（被影響者）の意見・態度・行動を変化させることのできる能力」（今井，1987）である。今井（1986）は French & Raven（1959　水原訳　1962）による古典的な分類を参考に，社会的勢力を再分類し，参照勢力，魅力勢力，専門勢力，正当勢力，賞勢力，罰勢力の 6 つに分類されることを報告している。なお，参照勢力は被影響者の影響者に対する同一視に基づいたものを，魅力勢力は被影響者の影響者に対する好意・好感に基づいたものを指すと，今井（1987）は述べている。また今井（1986）および French & Raven（1959　水原訳　1962）を踏まえると，専門勢力は影響者が保有している知識や技能等の程度に基づいたものを指し，正当勢力は影響者が被影響者に影響を与える正当な権利をもち，被影響者はこの影響を受け入れる義務を負っているような状況（例えば社会的な地位など）に基づいたものを指し，賞勢力とは影響者の報酬（被影響者にとって都合の良い状況など）を与え得る能力に基づいたものを指し，罰勢力とは影響者の影響に被影響者が従わない場合は被影響者が罰せられる予測に基づいたものを指す。

社会的勢力の観点でスクールカーストを捉えた際に，どのような要因がどの社会的勢力に影響を及ぼし，スクールカースト形成に至るのかについて検討した研究は見当たらない。スクールカーストの決定要因としては，前述のように先行研究（堀，2015；水野他，2015；森口，2007；鈴木，2010）ではコミュニケーション能力について検討されている。一方で鈴木（2012）は，スクールカーストで上位のグループに位置づけられる人物には，にぎやか，気が強い，異性の評価が高い，若者文化へのコミットメントが高いという特徴がみられ，下位のグループに位置づけられる人物には特徴がなく，しいて言えば，地味，

目立たないと報告している。すなわちスクールカースト上位者の特徴はコミュニケーション能力以外の要因もあると言える。また水野他（2015）の結果より，男女によって各要因のスクールカースト形成に及ぼす影響力が異なる可能性が示唆される。さらにスクールカーストは，「生徒間で共有され」ている（鈴木，2010）「クラス内のステイタス」（森口，2007）であり，他者に影響を及ぼす力を備えているため，児童生徒の個々人のクラス内のステイタスおよびその決定要因は，自己認知で捉えるよりむしろ周囲の認知で捉える方が重要になってくるだろう。

以上を踏まえ，本研究では，スクールカーストの定義そのものは森口（2007）の「クラス内のステイタス」とし，そのステイタスの決定要因を社会的勢力の観点から捉える。本研究の目的は，周囲からスクールカースト上位者として捉えられる人物の保有する社会的勢力およびその社会的勢力を規定する特徴（外見的・内面的特徴）を男女別に明らかにすることとする。なお水野他（2015）では，青年は友人関係を重視するという点から中学生を対象としていることを踏まえ，本研究も中学生時代に着目することとする。

**研究計画**

まず，スクールカースト上位者の外見的，内面的な特徴に関する項目を予備調査によって収集する。本調査は大学生を対象とし，回答者自身の中学生時代の男子と女子のそれぞれのスクールカースト上位者を想起させる回想法による調査を実施する。なおスクールカースト上位者については「クラス内の地位が高い生徒」というきき方で想起させる。本調査では社会的勢力と外見的・内面的特徴を測定するが，そのうち社会的勢力については，中学生のクラスメイト同士で社会的地位や権限などに大きな差異はないため，今井（1986）の分類のうち正当勢力と賞勢力を中学生のスクールカーストに適用するのは無理があろう。よってこれらを除き，参照勢力，専門勢力，魅力勢力，罰勢力の 4 つで捉えることとする。

分析計画としては本研究の目的に照らし合わせ，①男子，女子のスクールカースト上位者の社会的勢力を規定する外見的・内面的特徴を明らかにするため，重回帰分析を行う。また，②男子，女子のスクールカースト上位者のもつ社会的勢力のパターンを明らかにするためクラスター分析を行い，さらに各クラスターの特徴を外見的・内面的特徴の視点から検討する。

## 予備調査

**方法**

H 大学の学部 4 年生 25 人を調査対象者とした質問紙調査を行った。質問紙では，今井（1986）の社会的勢力のうち参照勢力，魅力勢力，罰勢力の各々をもつと思われる個人の外見的・内面的特徴について自由記述させた。参照勢力の高い人として「クラスの多くの人に『このような人になりたい』と思われていた人」と，魅力勢力の高い人として「クラスの多くの人から好かれていた人」と，罰勢力の高い人として「クラスの多くの人がその人に逆らうと都合の悪いことをされると感じていた人」と提示して，中学生時代のクラスメイトでそれぞれに該当する人の特徴を自由記述で尋ねた。なお能力勢力の特徴については，その定義から，学問，運動，芸術の 3 側面での能力をその特徴として筆者が挙げた。

**結果**

得られた自由記述の内容について，社会的勢力の種類を問わず分類したところ，「容姿」，「性格」，「コミュニケーション」，「能力」，「態度」の 5 つに分類された。「コミュニケーション」に関しては，森口（2007）の自己主張力，共感力，同調力を参考に筆者が独自に作成した項目を加えた。各々の領域にポジティブな内容もネガティブな内容も含まれるようにして，最終的に 27 項目の外見的・内面的特徴の質問項目を作成した（Table 1）。

## 本調査

**方法**

調査対象者と調査手続き　H 大学に所属する学生 183 名を対象に質問紙調査を実施した。講義時間を利用して 2016 年 10 月に集合調査を実施した。なお，調査対象者には調査への回答は任意であることを口頭で説明した。対象者のうち回答に不備のあった 20 名を除いた 163 名（有効回答率 89.1%）を分析対象とした。男性が 71 名（平均年齢 20.06 歳），女性が 92 名

（平均年齢 19.99 歳）で，共学は 153 名（うち 2 名は男子に関する回答のみ），男子校は 4 名，女子校は 6 名であった。

**調査内容**　まず，フェース項目として，性別，年齢，中学校種別（共学・男子校・女子校）を尋ねた。

次に自分自身の中学校時代の「クラス内の地位が高い男子」と「クラス内の地位が高い女子」を各々一人ずつ想起するよう求めた。なお中学校が共学と答えた人は両方に，男子校もしくは女子校の場合はその性別のみに回答をするよう求めた。したがって「クラス内の地位が高い男子」の回答者数は 157,「クラス内の地位が高い女子」の回答者数は 157 となった。

想起した「クラス内の地位が高い男子」もしくは「クラス内の地位が高い女子」について，その人物のもつ社会的勢力を尋ねた。今井（1986）の社会的勢力のうち，参照勢力については「『そのような人になりたい』と思っていた」，魅力勢力については「好感を持っていた」，罰勢力については「逆らうと都合の悪いことをされると感じていた」，専門勢力については「知識能力があり尊敬していた」という質問項目で尋ね，想起した人物について当てはまる程度を，「まったくあてはまらない」（1 点）から「非常にあてはまる」（4 点）までの 4 段階で評定を求めた。

次に，その想起した人物それぞれの外見的・内面的特徴について，予備調査で作成した項目（Table 1）を用いて尋ねた。回答形式は「まったくあてはまらない」（1 点）～「非常にあてはまる」（4 点）までの 4 段階評定とした

## 結果

**主成分分析とα係数**　「クラス内の地位が高い男子」「クラス内の地位が高い女子」各々を想定した場合の外見的・内面的特徴に関する質問項目について，各分類を構成しているか確認するため，分類ごとに 1 成分を仮定した主成分分析を行った。主成分負荷量の絶対値が.40 未満の項目を除外した結果，Table 1 のとおりとなり，男子と女子とで各分類を構成する項目がほぼ一致していた。分類のうち唯一「態度」で男女に差があったため，男子の「態度」の分類にのみ含まれていた「よく笑っていた」の項目を除外して男子と女子の項目を一致させ，以降の分析を行うこととした。

いずれの外見的・内面的特徴もその得点が高くなるほどポジティブな側面が高くなるようにするため，ネガティブな意味の項目を逆転項目とし，その得点化の基準を逆にして，各分類のα係数を算出したところ，「クラス内の地位が高い男子」では，容姿が.64，性格が.77，コミュニケーションが.73，能力が.70，態度が.85 となった。「クラス内の地位が高い女子」

Table 1. 予備調査で作成した外見的・内面的特徴の質問項目および主成分分析の結果

| 分類 | 質問項目 | | 主成分負荷量 クラス内の地位が高い男子 | 主成分負荷量 クラス内の地位が高い女子 |
|---|---|---|---|---|
| 容姿 | おしゃれに気を遣っていた | | | |
| | 身だしなみが崩れていた | ※ | .86 | .85 |
| | 顔立ちが整っていた | | | |
| | 怖い雰囲気を感じていた | ※ | .86 | .85 |
| 性格 | 優しい性格であった | | -.82 | -.80 |
| | 元気な性格であった | | | |
| | わがままな性格であった | ※ | .88 | .87 |
| | 気が強い性格であった | ※ | .79 | .75 |
| コミュニケーション | 自分の意見を上手に主張できていた | | .59 | .58 |
| | 他人を思いやることができていた | | .77 | .81 |
| | 誰とでも話すことができていた | | .64 | .71 |
| | 周りのノリに合わせることができていた | | .47 | .52 |
| | 強い口調で話していた | ※ | -.59 | -.45 |
| | 人のことを気にせず物事を決めていた | ※ | -.61 | -.60 |
| | まとめたがりだった | | | |
| | 他人にNOと言わせなかった | ※ | -.64 | -.58 |
| 能力 | 勉強ができていた | | .91 | .89 |
| | 運動ができていた | | | |
| | 勉強が得意ではなかった | ※ | -.87 | -.88 |
| | 運動が得意ではなかった | | | |
| | 芸術面において一芸秀でていた | | .56 | .71 |
| 態度 | 誰とでも仲が良かった | | -.70 | -.72 |
| | いじめをしていた | ※ | .82 | .89 |
| | 先生に反抗的だった | ※ | .76 | .82 |
| | よく笑っていた | | -.46 | |
| | 暴力的だった | ※ | .85 | .76 |
| | 悪口を言わなかった | | -.77 | -.59 |

注1. 表中に主成分負荷量の値が記載されていない項目は，分析途中で除外されたものであり，以下の分析にこの項目は含まれない
注2.※の項目は，以下の分析で逆転項目として扱うことを表す

では容姿が.62，性格が.74，コミュニケーションが.71，能力が.77，態度が.82 となった。なお，男女ともに容姿の α 係数は高くないが，項目数が 2 項目と少ないことを踏まえ，信頼性は確認されたと解釈した。以降は，外見的・内面的特徴の各分類に含まれる項目の平均値をその得点として分析を行った。

**記述統計と重回帰分析**　「クラス内の地位が高い男子」と「クラス内の地位が高い女子」の社会的勢力および外見的・内面的特徴の平均および標準偏差を算出したところ，Table 2 のとおりとなった。

次に外見的・内面的特徴が社会的勢力に及ぼす影響を検証するため，重回帰分析を行った。まず「クラス内の地位が高い男子」のデータを用い，外見的・内面的特徴を独立変数，社会的勢力を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法，以下同様）を行った（$n$=157）。その結果，容姿が罰勢力に負の影響を及ぼし，性格が罰勢力に負の影響を，専門勢力に正の影響を及ぼし，コミュニケーションが魅力勢力に正の影響を及ぼし，能力が参照勢力，罰勢力，専門勢力に正の影響を及ぼし，態度が参照勢力と魅力勢力に正の影響を及ぼすことが示された（Table 3）。さらに「クラス内の地位が高い女子」のデータを用い，外見的・内面的特徴を独立変数，社会的勢力を従属変数とした重回帰分析を行った（$n$=157）。その結果，容姿が罰勢力に負の影響を及ぼし，性格が参照勢力，魅力勢力，専門勢力に正の影響を及ぼし，コミュニケーションが魅力勢力に正の影響を及ぼし，能力は専門勢力に正の影響を及ぼすことが示された（Table 3）。

**クラスター分析**　「クラス内の地位が高い男子」のデータを対象に，4 つの社会的勢力の得点に基づいてユークリッド距離を用いた Ward 法によるクラスター分析（以下同様）を行った。その結果，3 つのクラスターに分類することが最も妥当な解釈ができるものと考えられた。各クラスターの社会的勢力の得点をグラフに示したところ Figure 1 のとおりとなった。各クラスターを独立変数，4 つの社会的勢力を従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果，参照勢力においてクラスターによる主効果が見られ（$F(2,154)=78.09$, $p<.001$），多重比較（Tukey 法，以下同様）の結果，クラスターⅢの得点がクラスターⅠおよびⅡよりも有意に高く，クラスターⅠの得点がクラスターⅡよりも有意に高かった（有意水準 5%，以下同様）。魅力勢力において，クラスターによる主効果が見られ（$F(2,154)= 88.04$, $p<.001$），多重比較の結果，クラスターⅠおよびⅢよりクラスターⅡの得点が有意に高かった。罰勢力において，クラスターによる主効果が見られ（$F(2,154)=36.20$, $p<.001$），多重比較の結果，クラスターⅡおよびⅢの得点がクラスターⅠよりも有意に高かった。専門勢力においてクラスターによる主効果が見られ（$F(2,154) =30.37$, $p<.001$），クラスターⅠおよびⅢの得点がクラスターⅡよりも有意に高かった。よって，各クラスターの特徴に従って，次のように命名した。

Table 2. クラス内の地位が高い男子，女子それぞれの社会的勢力および外見的・内面的特徴の平均と標準偏差

| | | クラス内の地位が高い男子 | | クラス内の地位が高い女子 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | *M* | *SD* | *M* | *SD* |
| 社会的勢力 | 参照勢力 | 1.94 | 0.86 | 1.89 | 0.88 |
| | 魅力勢力 | 2.66 | 0.89 | 2.32 | 0.90 |
| | 罰勢力 | 1.98 | 0.94 | 2.11 | 1.01 |
| | 専門勢力 | 2.13 | 0.88 | 2.01 | 0.82 |
| 外見的・内面的特徴 | 容姿 | 2.77 | 0.82 | 2.66 | 0.82 |
| | 性格 | 2.48 | 0.75 | 2.25 | 0.69 |
| | コミュニケーション | 2.83 | 0.48 | 2.72 | 0.50 |
| | 能力 | 2.41 | 0.74 | 2.38 | 0.72 |
| | 態度 | 2.74 | 0.72 | 2.67 | 0.67 |

注. クラス内の地位が高い男子，女子ともに各々の回答者数は157人

Table 3. 重回帰分析の結果

| | クラス内の地位が高い男子 | | | | クラス内の地位が高い女子 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 参照勢力 | 魅力勢力 | 罰勢力 | 専門勢力 | 参照勢力 | 魅力勢力 | 罰勢力 | 専門勢力 |
| 容姿 | | | -.30 ** | | | | -.51 *** | |
| 性格 | | | -.46 *** | .26 *** | .47 *** | .37 *** | | .35 *** |
| コミュニケーション | | .38 *** | | | | .26 ** | | |
| 能力 | .21 * | | .16 * | .47 *** | | | | .42 *** |
| 態度 | .24 ** | .22 * | | | | | | |
| $R^2$ | .16 *** | .33 *** | .42 *** | .38 *** | .22 *** | .35 *** | .26 *** | .44 *** |
| $AdjR^2$ | .15 *** | .32 *** | .41 *** | .38 *** | .22 *** | .34 *** | .26 *** | .44 *** |

注1.*** $p<.001$,** $p<.01$,* $p<.05$

注2. 表内の数値は標準化偏回帰係数

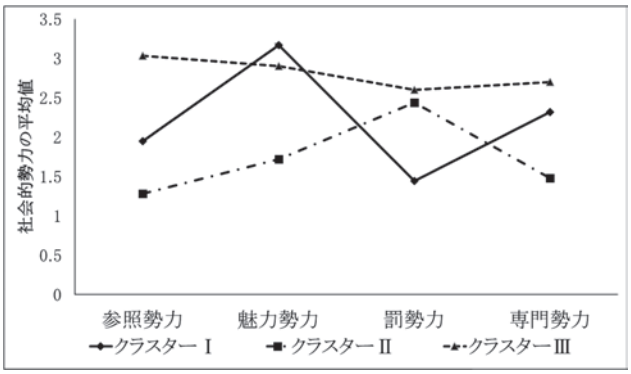


Figure 1. クラス内の地位が高い男子の，各クラスターの社会的勢力の特徴

(a)　魅力勢力高群（クラスターⅠ）: 魅力勢力の得点が高く，罰勢力の得点が低い群（77 名）。

(b)　罰勢力高群（クラスターⅡ）: 罰勢力の得点が高く，他 3 つの社会的勢力の得点が低い群（50 名）。

(c)　全社会的勢力高群（クラスターⅢ）: 4 つの社会的勢力の得点が高い群（30 名）。

「クラス内の地位が高い女子」のデータを対象にクラスター分析を行った。その結果，4 つのクラスターに分類することが最も妥当な解釈ができるものと考えられた。各クラスターの社会的勢力の得点をグラフに示したところ，Figure 2 のとおりとなった。各クラスターを独立変数，4 つの社会的勢力を従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果，参照勢力において，クラスターによる主効果が見られ（$F(3,153)=103.12, p<.001$），多重比較の結果，クラスターⅠの得点が他の 3 つのクラスターよりも有意に高く，クラスターⅡの得点がクラスターⅢおよびⅣよりも有意に高かった。魅力勢力において，クラスターによる主効果が見られ（$F(3,153)=50.68, p<.001$），多重比較の結果，クラスターⅠの得点が他の 3 つのクラスターよりも有意に高く，クラスターⅡの得点がクラスターⅢおよびⅣよりも有意に高く，クラスターⅣの得点がクラスターⅢより有意に高かった。罰勢力において，クラスターによる主効果が見られ（$F(3,153)=109.00, p<.001$），多重比較の結果，クラスターⅢの得点が他の 3 つのクラスターよりも有意に高く，クラスターⅡの得点がクラスターⅠおよびⅣよりも有意に高かった。専門勢力において，クラスターによる主効果が見られ（$F(3,153)=34.92, p<.001$），多重比較の結果，クラスターⅠの得点が他の 3 つのクラスターよりも有意に高く，クラスターⅡの得点がクラスターⅢおよびⅣよりも有意に高かった。以上のことから，各クラスターの特徴にしたがって，次のように命名した。

(a)　罰勢力以外高群（クラスターⅠ）: 罰勢力の得点が低く，他 3 つの社会的勢力の得点が高い群（30 名）。

(b)　全社会的勢力中群（クラスターⅡ）: 4 つの得点が中程度の群（64 名）。

(c)　罰勢力高群（クラスターⅢ）: 罰勢力の得点が高く，他 3 つの社会的勢力の得点が低い群（21 名）。

(d)　魅力勢力以外低群（クラスターⅣ）: 魅力勢力の得点がやや高く，他 3 つの社会的勢力の得点が低い群（42 名）。

**分散分析**　「クラス内の地位が高い男子」の場合において，クラスターごとの外見的・内面的特徴の平均，標準偏差を算出したところ，Table 4 のとおりとなった。クラスターを独立変数，外見的・内面的特徴を従属変数とした一要因分散分析を行った結果，容姿においてクラスターの主効果が見られ（$F(2,154)=21.82, p<.001$），多重比較の結果，魅力勢力高群の得点が他の 2 群よりも有意に高く，全社会的勢力高群の得点 が罰勢力高群よりも有意に高かった。性格においてクラスターの主効果が見られ（$F(2,154)=17.38, p<.001$），多重比較の結果，魅力勢力高群および全社会的勢力高群の得点が罰勢力高群よりも有意に高かった。コミュニケーションにおいて，クラスターの主効果が見られ（$F(2,154)=26.61, p<.001$），多重比較の結果，魅力勢力高群および全社会的勢力高群の得点が罰勢力高群よりも有意に高かった。能力において，クラスターの主効果が見られ（$F(2,154)=10.84, p<.001$），多重比較の結果，魅力勢力高群および全社会的勢力高群の得点が罰勢力高群よりも有意に高かった。態度において，クラスターの主効果が見られ（$F(2,154)=19.82, p<.001$），多重比較の結果，魅力勢力高群および全社会的勢力高群の得点が罰勢力高群よりも有意に高かった。

「クラス内の地位が高い女子」の場合において，クラスターごとの外見的・内面的特徴の平均，標準偏差を算出したとこ

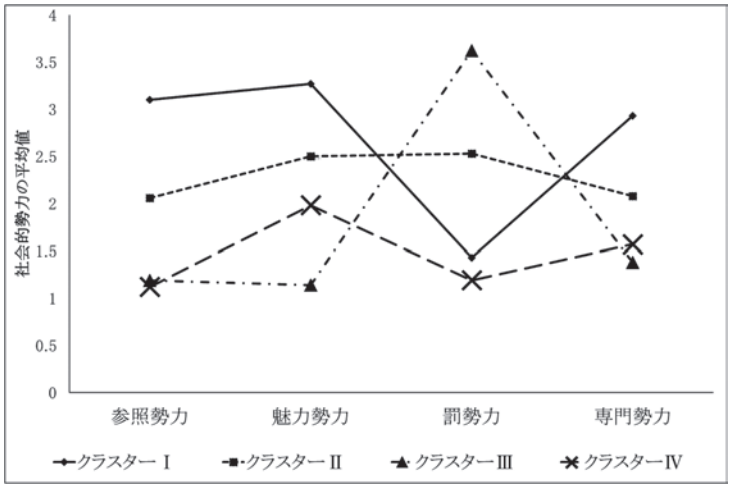


Figure 2. クラス内の地位が高い女子の，各クラスターの社会的勢力の特徴

Table 4. クラス内の地位が高い男子の，各クラスターの外見的・内面的特徴の平均と標準偏差

| | 魅力勢力高群（$n$=77） | | 罰勢力高群（$n$=50） | | 全社会的勢力高群（$n$=30） | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* |
| 容姿 | 3.13 | 0.60 | 2.26 | 0.92 | 2.70 | 0.66 |
| 性格 | 2.78 | 0.63 | 2.05 | 0.76 | 2.43 | 0.66 |
| コミュニケーション | 3.04 | 0.40 | 2.49 | 0.46 | 2.83 | 0.36 |
| 能力 | 2.48 | 0.67 | 2.07 | 0.76 | 2.79 | 0.65 |
| 態度 | 3.02 | 0.62 | 2.28 | 0.74 | 2.78 | 0.56 |

Table 5. クラス内の地位が高い女子の，各クラスターの外見的・内面的特徴の平均と標準偏差

| | 罰勢力以外高群（$n$=30） | | 全社会的勢力中群（$n$=64） | | 罰勢力高群（$n$=21） | | 魅力勢力以外低群（$n$=42） | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* |
| 容姿 | 3.32 | 0.76 | 2.52 | 0.61 | 1.76 | 0.74 | 2.85 | 0.71 |
| 性格 | 2.84 | 0.55 | 2.24 | 0.59 | 1.56 | 0.57 | 2.17 | 0.63 |
| コミュニケーション | 3.14 | 0.32 | 2.69 | 0.43 | 2.28 | 0.51 | 2.69 | 0.51 |
| 能力 | 2.91 | 0.67 | 2.37 | 0.57 | 1.97 | 0.80 | 2.23 | 0.72 |
| 態度 | 3.24 | 0.48 | 2.65 | 0.53 | 1.98 | 0.72 | 2.63 | 0.62 |

ろ，Table 5 のとおりとなった。クラスターを独立変数，外見的・内面的特徴を従属変数とした一要因分散分析を行った結果，容姿において，クラスターの主効果が見られ（$F(3,153)=23.02, p<.001$），多重比較の結果，罰勢力以外高群の得点が他の 3 群よりも有意に高く，全社会的勢力中群および魅力勢力以外低群の得点が罰勢力高群よりも有意に高かった。性格において，クラスターの主効果が見られ（$F(3,153)=19.76, p<.001$），多重比較の結果，罰勢力以外高群の得点が他の 3 群よりも有意に高く，全社会的勢力中群および魅力勢力以外低群の得点が罰勢力高群よりも有意に高かった。コミュニケーションにおいて，クラスターの主効果が見られ（$F(3,153)=16.07, p<.001$），多重比較の結果，罰勢力以外高群の得点が他の 3 群よりも有意に高く，全社会的勢力中群および魅力勢力以外低群の得点が罰勢力高群よりも有意に高かった。能力において，クラスターの主効果が見られ（$F(3,153)=9.84, p<.001$），多重比較の結果，罰勢力以外高群の得点が他の 3 群よりも有意に高かった。態度において，クラスターの主効果が見られ（$F(3,153)=19.86, p<.001$），多重比較の結果，罰勢力以外高群の得点が他の 3 群よりも有意に高く，全社会的勢力中群および魅力勢力以外低群の得点が罰勢力高群よりも有意に高かった。

## 考察

### 各社会的勢力の規定因

まずは周囲からスクールカースト上位者として捉えられる人物の保有する社会的勢力を規定する特徴の男女での共通点について検討する。重回帰分析の結果より，社会的勢力のうち専門勢力については，スクールカースト上位者として男子を想定した場合も女子を想定した場合も，能力と性格が規定因として働いており，いずれも勉強面や芸術面で秀でていることや，温和な性格であることが，周囲からの尊敬の念を生み出し専門勢力となることが示唆された。また，魅力勢力の規定因として男女で共通なものとしてコミュニケーションがあった。森口（2007）や鈴木（2010）において人気度で捉えていたスクールカースト上位者は，社会的勢力で言えば魅力勢力の高い者に該当するであろう。森口（2007）や鈴木（2010）ではコミュニケーション能力が高いことがスクールカースト上位者の特徴と言われており，本研究の結果はスクールカースト上位者の男女ともに森口（2007）や鈴木（2010）を支持していた。また，男女共通して，容姿が罰勢力の規定因として働いていた。具体的に言えば，怖い雰囲気の容姿であるほど，この人に逆らうと悪いことが生じると感じ，罰勢力となることが示唆された。

一方で「この人のようになりたい」という気持ちから生じる参照勢力の規定因に男女で大きな差異がみられた。本研究の結果より，周囲から「この人のようになりたい」と思われている男子のスクールカースト上位者については，勉強面や芸術面で秀でていることと，周囲に対して友好的な態度を示していることが特徴といえるが，周囲から「この人のようになりたい」と思われている女子のスクールカースト上位者については，温和な性格が特徴と言える。

「スクールカースト」という呼び名が世の中に出る以前に，西本（1998）は「学級におけるインフォーマル地位」という捉え方で，中学生を対象にこの「学級におけるインフォーマル地位」の規定因を検討している。スクールカーストの定義を踏まえると，これはスクールカーストを扱っていると言える。西本（1998）はインフォーマルな地位を人気と勢力の 2 つの側面で捉え，人気をソシオメトリックテスト地位で，勢力を回答者が言うことをきいている級友の名前を尋ねることで測定している。人気および勢力を規定する要因を検討したところ，人気は思いやり，所有物（多くのものをくれたり持っていたりする），指導性（クラスや係でまとめる役についている）という要素が，勢力は思いやり，学力，明朗性，外見性（きれい，かっこいい），活動性（ケンカが強い）という要素が影響を及ぼしていた。西本（1998）の分析は男女込みで行われているが，本研究の結果と一致している箇所がいくつかみられる。例えば人気については本研究で扱っている社会的勢力のうち魅力勢力が近いと思われるが，本研究の結果では男女ともに協調的なコミュニケーションをとっているほど魅力勢力が高いことが明らかになっており，また男子の場合は周囲に対して友好的な態度を示していること，女子の場合は性格が温和であることが，魅力勢力を高めることも明らかになった。これらは西本（1998）で思いやりが高いほど人気が高いという結果と一致すると言えよう。西本（1998）では，勢力をそのタイプ別に検討していないため，本研究の結果と単純な比較はできない。本研究で扱っている社会的勢力のうちポジティブなもの，すなわち参照勢力，魅力勢力，専門勢力の結果と西本（1998）の結果を比較して考察すると，本研究の結果では参照勢力，魅力勢力，専門勢力のいずれかに対して，男女ともに協調的なコミュニケーション，温和な性格，勉強面等で秀でていることなどが規定因となっており，さらに男子では周囲に対する友好的な態度も規定因として働いていたが，これは西本（1998）で勢力への影響力要因として思いやり，学力，明朗性が働いていたことと一致した結果と言えよう。

### スクールカースト上位者のタイプ

社会的勢力の得点を用いたクラスター分析で検討した結果より，男子のスクールカースト上位者のタイプとしては，魅力勢力の得点が高く，罰勢力の得点が低い「魅力勢力高群」，罰勢力の得点が高く，他 3 つの社会的勢力の得点が低い「罰勢力高群」，4 つの社会的勢力の得点が高い「全社会的勢力高群」の 3 タイプが抽出された。スクールカースト上位者と想定される者のうち，「魅力勢力高群」が最も多く約 50%，次いで「罰勢力高群」が約 30%，「全社会的勢力高群」が約 20%を占めていた。それぞれのタイプの外見的・内面的特徴を踏まえて考えると，「魅力勢力高群」と「全社会的勢力高群」はともに性格は穏やかで勉強等もできて他者と協調的なコミュニケーションをとる傾向がみられるところは共通でみられるが，外見面で違いがある。「全社会的勢力高群」は悪ぶって見えるところが特徴であり，それがこの人に逆らったら怖いが（罰勢力），

こんな人になりたいという憧れを抱き（参照勢力），スクールカースト上位者となるタイプと言える。一方「魅力勢力高群」は外見上怖いというイメージが無いため，参照勢力や罰勢力の得点が「全社会的勢力高群」より低い。一方「罰勢力高群」は他の 2 群と外見的・内面的特徴が大きく異なり，外見上は恐ろしく，わがままで気が強い性格であり，制圧的なコミュニケーションをとる傾向が見られ，勉強等で秀でた面が見られず，暴力的で反抗的な態度をとる傾向がみられる。

女子に関しては，罰勢力の得点が低く，他 3 つの社会的勢力の得点が高い「罰勢力以外高群」， 4 つの社会的勢力の得点がいずれも中程度の「全社会的勢力中群」，罰勢力の得点が高く，他 3 つの社会的勢力の得点が低い「罰勢力高群」，4 つの社会的勢力全てが低い傾向がみられるが，特に魅力勢力以外 3 つの社会的勢力の得点が低い「魅力勢力以外低群」の 4 タイプが抽出された。スクールカースト上位者と想定される者のうち，「全社会的勢力中群」が最も多く約 40%を占め，次いで「魅力勢力以外低群」が約 25%，「罰勢力以外高群」が約 20%，「罰勢力高群」が約 15%を占めていた。それぞれのタイプの外見的・内面的特徴を踏まえて考えると，周囲からあんな人になりたいと思われ，好意度も高く，能力面で尊敬されているが，怒らせたら何か悪いことがあるというイメージの無い「罰勢力以外高群」は，外見的に怖くなく，性格は穏やかで，協調的なコミュニケーションをとり，能力的に秀でた面があり，周囲に対して友好的な態度を示すという特徴が見られた。一方でこの「罰勢力以外高群」と真反対のタイプと言える，怒らせたら何か悪いことあるというイメージが高い「罰勢力高群」は，その外見的・内面的特徴も真反対であり，見た目が恐ろしく，性格はわがままで気が強く，制圧的なコミュニケーションをとる傾向が見られ，勉強面等で秀でたところが見られず，暴力的で反抗的な態度をとる傾向が見られた。なお，「全社会的勢力中群」と「魅力勢力以外低群」との間には外見的・内面的特徴に差異がみられず，いずれの特徴においても「罰勢力以外高群」ほどポジティブではなく「罰勢力高群」ほどネガティブではない中程度の評定結果であった。

スクールカースト上位者の各タイプが占める割合を見てみると，男子では性格は穏やかで勉強等もできて他者と協調的なコミュニケーションをとる者で，社会的勢力としては魅力勢力および専門能力が高い者が多いことがわかる。この結果は小学生を対象に学級内の勢力地位の高い者の特徴を検証した田崎（1982）の結果と一致しているところがみられる。田崎（1982）では回答者が言うことを聞く級友の名前を尋ねることで，学級内で勢力をもっている児童を洗い出し，選択数の多い者を勢力地位高群に割り振った。田崎（1982）では，高地位群の特徴としては，親和性（友好的である），指導性（自ら進んで責任をもって仕事をする），優越性（優れた面がある），明朗・類似（おもしろい，自分と趣味や性格が似ている），業績（勉強ができる）が高いことが挙げられている。特に親和性，優越性，業績が高いという特徴は，本研究で男子のスクールカースト上位者の多くで見られた特徴と一致している。一方女子では，本研究の結果，社会的勢力，外見的・内面的特徴の得点がいずれも中程度の者がスクールカースト上位者に多く，田崎（1982）と一致した結果とは言えない。

スクールカースト上位者のタイプとして，男子，女子共に「罰勢力高群」が抽出された。男女の「罰勢力高群」の特徴は，社会的勢力の側面でも，また外見的・内面的な特徴の側面でも，類似していた。男女ともに周囲に怖がられることで権力をもつタイプのスクールカースト上位者が一定数いることが確認された。これまでのスクールカーストの定義には「人気度」が含まれていたが，この結果より，人気の高さでスクールカーストを説明できないケースの存在が明らかになった。その他，男女とも魅力勢力が高く罰勢力が低い群（男子で魅力勢力高群，女子で罰勢力以外高群）において，いずれの外見的・内面的特徴もポジティブな傾向が見られたことが，男女の共通点として挙げられる。

一方で，男女におけるスクールカースト上位者のタイプの違いも明らかになった。男子では罰勢力も含めた全てが高い群（全社会的勢力高群）が抽出されたものの，女子では全ての社会的勢力が高いタイプは見当たらず，そのかわりに罰勢力も含め全ての社会的勢力が中程度の群（全社会的勢力中群）や社会的勢力が全般的に低い群（魅力勢力以外低群）といった全ての社会的勢力が中程度以下の群が抽出された。女子の場合は，このような群の占める割合が高いことから，本研究で扱った社会的勢力以外の要因によって，スクールカースト上位者の影響力が発揮されているケースが多いのかもしれない。

**本研究の意義**

森口（2007）や堀（2015）が論じているように，スクールカーストはいじめと関連があると考えられており，本研究はいじめの加害者になりうるスクールカースト上位者の特徴を社会的勢力の視点から男女別に検討した。いじめ防止のためには，学級集団形成やそのための学級集団のアセスメントが重要である。ただ単にスクールカースト上位者を把握するのみでなく，彼らの他生徒への影響力も把握しつつ，いじめ防止のための学級経営が望まれる。そのためにも，本研究においていじめ加

害者となりうるスクールカースト上位者の特徴を社会的勢力の側面から明らかにしたことは大変意義がある。

本研究の結果，男女ともにいじめの加害者になりやすい罰勢力の高いスクールカースト上位者が一定数いることが明らかになった。さらに男子では罰勢力が高くかつ他の社会的勢力も高いスクールカースト上位者の存在が明らかになった。男女ともにみられた罰勢力のみが高い「罰勢力高群」は，スクールカースト上位者の他のタイプと外見的・内面的特徴に大きな差異が見られ，生徒からも教師からも把握されやすいと考えられる。一方で男子に見られた，罰勢力を含めた「全社会的勢力高群」の存在は，いじめを深刻化させる可能性が高い。というのは「全社会的勢力高群」がいじめに加担している場合，他の社会的勢力も同時に高いため，周囲の生徒が「この人に逆らうと怖い」という気持ちと同時に「この人のようになりたい」という気持ちも抱き，いじめに積極的に加担することも考えられる。外見的・内面的特徴も，男子生徒にみられるもう一つのスクールカースト上位者のタイプである，罰勢力の低い「魅力勢力高群」と類似した点が多く，この 2 群が判別しにくいことが推測される。

**今後の課題**

本研究の課題を 3 点挙げる。まず 1 点目は，本研究ではスクールカースト上位者のみを対象とした点である。クラス内ステイタスであるスクールカーストの実態を明らかにするためには，スクールカースト下位者に評定されやすい人物の特徴も検討する必要があろう。

2 点目は，本研究で扱った個人の外見的・内面的特徴以外にも，スクールカーストを規定する要素が存在する可能性がある点である。個人の外見的・内面的特徴は，本研究の予備調査で得られた 5 つの分類を用いて研究を進めた。しかし鈴木（2012）がスクールカースト上位者の特徴として挙げているいくつかの項目（例えば「異性の評価が高い」「若者文化へのコミットメントが高い」など）や，西本（1998）で「学級におけるインフォーマル地位」の規定要因として検討している家庭環境（親の学歴や職業など）など，本研究で検討していない項目がいくつかある。これらの特徴にも着目して検討していく必要があろう。

3 点目は，調査の方法である。本研究では大学生を対象に各自の中学生時代に関して回想法を用いて調査したが，過去のことであり記憶があいまいになっている可能性があること，約 5 年前のことを想起しており，現在の中学生のスクールカースト上位者の特徴とズレがある可能性が否定できないことなど，調査方法には問題が残る。

## 引用文献


French, J. R. P., Jr. & Raven, B. H. (1959). The basis of social power. In D. Cartwright (Ed.) , *Studies in social power.* (pp. 150-167). Michigan: Institute for Social Research. （水原泰介（訳）(1962). 社会的勢力の基盤　千輪　浩（監訳）　社会的勢力　(pp. 193-217).　誠信書房.）

堀 裕嗣 (2015). スクールカーストの正体　キレイゴト抜きのいじめ対応　小学館.

今井 芳昭 (1986). 親子関係における社会的勢力の基盤　社会心理学研究, *1*, 35-41.

今井 芳昭 (1987). 影響者が保持する社会的勢力の認知と被影響の認知・影響者に対する満足度との関係　実験社会心理学研究, *26*, 163-173.

水野 君平・加藤 弘通・川田 学 (2015). 中学生における「スクールカースト」とコミュニケーション・スキル及び学校適応感の関係―教室内における個人の地位と集団の地位という視点から―　子ども発達臨床研究, *7*, 13-22.

森口 朗 (2007). いじめの構造　新潮社.

西本 裕輝 (1998). 学級におけるインフォーマル地位と家庭環境の関連性に関する実証的研究 実験社会心理学研究, *38*, 1-16.

鈴木 翔 (2010). 「スクールカースト」とは何か？―首都圏の公立中学生を対象とした質問紙調査の分析から―　日本教育社会学大会発表要旨集録, *62*, 196-197.

鈴木 翔 (2012). 教室内カースト　光文社.

田崎 敏昭 (1982). 学級集団における勢力地位と勢力資源　心理学研究, *53*, 165-168.